広報委員の一言

広報委員の一言の順番が回ってきました。筆まめでない私にとっては、少し気が重く感じられます。たいした趣味もなく、仕事（専門）に関する内容は個人情報保護の問題が大きく、取り上げにくいところです。かといって、食べることや飲むこと、街並み探検の話ばかりでは呆れられてしまいそうで、気が引けます。今回は３月16日に私が部長を務めている医学部俳句部の卒業句会がありますので、俳句（部）を話題にしたいと思います。

新潟大学医学部法医学教室は、第２代教授が「ホトトギス四Ｓ」のお一人で非常に高名な高野与巳（素十）先生、第３代教授が山内峻呉（大刀）先生、第４代が茂野録良（六花）先生、第５代が山内春夫（百雷）先生と俳人の先生方が続いており、どの代からかは存じ上げませんが、俳句部の部長を務めてきました。百雷先生から俳句部への参加を度々勧めていただいたものの、文学的な素養が乏しい私はなんとかお断りしてきました。しかし、ついに参加することとなり、百雷先生から「千風」の俳号まで頂戴しました。とはいえ、句会は気乗りがせず、その場で慌てて詠んだり、句会後の食事会だけ出席したり、時には他の予定を理由に欠席したりしていました。まさに「句会」は私にとって「苦会」でした。不思議と百雷先生からお叱りを受けたことはなく、先生からは、「自分も最初は気乗りしなかったからね」と暖かく見守っていただきました。このような状況が数年間、続きました。ある句会で、素十先生の師である高濱虚子先生が「客観写生」、「花鳥諷詠」を提唱され（その時まで知らず）、素十先生は「客観写生」の実践者であり、私の句の多くが写実的（文学的な句は詠めない）であることから、「素十先生の流れですよ」とお言葉をいただきました。気分がよくなったことを覚えています。なんと言っても偉大な素十先生の流れですから。その後も不真面目な姿勢は続きましたが、１～２年ほど前からは、句会と関係なく俳句を考えたり、参加できないときは不在投句をするようにもなりました。「句会」が「苦会」であるとの思いは少しずつ薄れてきているようです。年齢を重ねたこともあると思いますが、百雷先生にあれこれ言われず、温かく見守っていただいたことの影響が大きいと思います。学生教育に携わる者として、学生を見守ることの大切さ、イライラしないこと、口うるさくしないことの大切さを改めて感じています。

本学人文学部の中本真人先生が、2024年３月に「新潟医科大学の俳人教授たち」（「ブックレット新潟大学」、新潟日報メディアネット）、2025年10月に「中田みづほの百句」（ふらんす堂）を出版されています。ご興味がございましたら、ぜひお手に取ってみてください。

（高塚　尚和　記）

広報委員会委員：佐藤雄一郎・橋立英樹・勝井豊・高塚尚和・磯部賢諭・髙野由美子・恩田晃・平塚素子・永井雅昭

新 潟 県 医 師 会 報・第 913 号〔令和８年４月〕

発行所　〒951-8581　新潟市中央区医学町通２-13　　新 潟 県 医 師 会
TEL：０２５－２２３－６３８１　FAX：０２５－２２４－６１０３
ホームページ：http://www.niigata.med.or.jp　メール：kaihou@niigata.med.or.jp
印刷所　〒950-8724　新潟市中央区和合町2-4-18　　株式会社 DI Palette